

〈巻 頭 言〉

8020は夢なのか

青 山 旬

8020運動という言葉は、保健従事者はほぼ知っている。80歳で20本の歯、ここまでは、確かに知られており、さらに、20本以上あればほとんどの食品を咀嚼することができることも知っている人も多いであろう。高齢者の楽しみを調査すると食べる楽しみが上位にくることから、いろいろな食品が咀嚼できることは重要と考えられる。しかし、どうすれば8020が達成できるかについて、根拠を示して説明できる人はいない。現在、よく見かける8020達成の方法というものは、こうすればいいだろうという推測に基づくものがほとんどである。しかし、多くの人が指摘しているのは、歯の喪失は老化によるものではないことである。歯を失う原因を調査すると、う蝕と歯周疾患が抜歯理由のほとんどであり、つまり、病気により歯は失われていくのである。病気が理由であれば予防法もあろうと考えられるが、これらの疾患の効果的な予防についても今まで、十分な対策が行われてきたのであろうか。う蝕予防法として最も親しんでいる歯みがきが、どれだけう蝕を減少させたかを目にしたことがあるだろうか。歯みがきのみで永久歯う蝕の予防をしたという報告はほとんどない。WHOはう蝕予防について、歯の強化(フッ化物の応用とフィッシャーシーラント)を中心とし、砂糖の摂取についても制限をすることが大切としているが、フッ化物配合歯磨剤を用いない場合の歯みがきはう蝕予防法ととらえていない。つまり、う蝕は細菌が引き起こす疾患でありながら、その対策は感染症対策ではないのである。このためか、WHOは組織改正で歯科保健の部局を非感染症部門に移した。しかしながら、歯周疾患の予防対策は、口腔内の個人と専門家による清掃を中心としている。

さて、8020運動は厚生省と日本歯科医師会が、また、日本歯科衛生士会が共通に取り組んできたが、その中心は8020という言葉の普及であった。各地での取り組みを集約するための厚生科学研究も始まった。過去8年で6000人以上が8020達成あるいはよい歯の高齢者として、表彰されている。しかし、8020の普及啓発にとどまらず、達成への研究も開始された。それは、8020達成者をケースとしたケースコントロールスタディーであり、ある団体では特定年齢の対象住民を対象としたコホート研究も開始されていると聞く。このように8020を達成するために必要な情報を集める努力が開始されているが、さらに歯の喪失リスク度を評価する健康診査が必要であることが指摘されている(瀧口徹：疫学的視点から見た「8020」；8020へのいざない [榊原悠紀田郎ほか]，1993)。地域保健法が施行され、地域の実情にあわせた取り組みを実施し、その情報を集約するだけでなく、調査・研究に基づき効果的な方法を解明し、有効な対策を見いだす努力も必要であり、歯科保健はそれが可能な分野と考える。また、それが8020達成への確実な方法であり、その努力が実れば8020も夢でなくなる日が必ず来る。